

資料

芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書

井上ゆかり採録・阿南満昭編集

1 少年期まで

私は昭和5年3月25日生まれです。仕事は漁業で、他にはなんも取り柄はなかです。京泊で生まれて京泊育ち。それこそどこ～にも行っとらんです。9歳のときに親父を病気でなくしたもんで母親1人で私たち兄妹4人ですが、4人を育ててくれました。

わたしの伯母が出水（鹿児島県出水市、水俣市に隣接）において、伯母から聞いたつですが、同じ女島に松崎ていうところがあつとです。そこで育ったらしかです親父は。3号線よりもまだちょっと向こう（内陸側）になります。だけん親父は農村の方から来たつですね。こっちに移り住んでから、漁を始めたというふうに聞いておつとです。3人くらい兄弟のおつて、1番下じゃったじゃなかったでしょう。

私が物心ついたときにはもう京泊において、親父が死んだときは私は9つだったから、親父が若いとき何をしよったか知らんとです。松崎という場所、地区からして百姓じゃなかったろうか。あそこは漁村じゃないし、親父たちはあそこで育つたて聞いてとるから。

1番上の兄貴は知つとったかもしれんけど、早く死んで。次男はここにおつたばってん、これも早う死んだです。もう兄貴どんもおらんです。どっちの兄貴もまだ私に昔話をして聞かせる歳じゃなかったですもん。だから親父たちがいつここに来たのか、わからんとです。松崎の方に親戚があるかないかも聞いてとらんです。先祖の墓地は向こうにあったから、親父の兄弟か、親か知らんばってん、親戚はあつたと思いますよ。

うちの親父の兄弟は、あたしが知つとる限りでは、その3人のうち2人までは、まだ伯父伯母が達者かときは私は見たけん知つとるばってんが、そのほかは位牌以外にはわからんとです。

私の伯父というのは、えびの市におつたです。飯野町であつたじゃなかですか。あそこにおつたです。それから伯母にあたる人はイトちゅうて、私が物心のついたころには、緒方正人君家の近所におつたんです。岩本吉次ちゅうて、そこに嫁入つたけれども子どもを持たんやつたもんだけん、うちの家内の兄貴を養子にもらつとったんです。小崎弥三の弟ですたいね。それで、養子ちゅうのは香月源吾ていうのですが。私が出水の網元に修業に行ったとき、源吾もその網元に働きに来つとったから、いつとき一緒に仕事したこともあります。源吾はすぐ兵隊にとられてしもうたですから、ほんのいつときだったですけど。

お袋はマセというて、もともとは津奈木の福浦です。お袋も百姓生まれ。

家内はフクエ、かたかなのフクエです。家内の兄貴が小崎弥三です。岩本廣喜と私は家内同士が姉妹で日頃から行き来がありました。向こうが7つ上です。

わたしの兄弟は4人おって、わたしゃそのうちの1番下です。男で1番下。私が下に妹が1人おったんです。1番上は保雄です。そして安人。そして私です、3番目。妹が政子ていうとが、亡くなってから5年になります。栃木におりまして、何の病気だったかはわかりません。

1番上の兄貴、保雄が亡くなったのは親父よりも1年か2年早かったです。昭和13年頃、たしか23歳、病気やったらしいです。私が8歳、小学校の2、3年頃です。福岡じゃったか、炭鉱がものすごく流行ったときがあったでしょ。死ぬ数年前から福岡に行っとったから漁師はしとらんはずです。この兄貴の顔も私はしんからは覚えとらんです。1年もたたんうちに親父と兄貴と2人ともなくしました。

そすと2番目の兄貴、安人の場合は、そこに写真があるばってんが、昭和24年、たしか23歳、病気で急死したです。私が満で19歳、数えて20歳のときだったかな。3歳上だったと思います。昔のことだけん小学校はたぶん出とらんと思います。小学生くらいのときには小崎網に行きよったですから。私は6年生までなんとか出してもろたばってんが、兄貴はたぶん出とらんと思います。その当時は行かんば行かんでよかったじゃって。

妹が果てた（死んだ）けん、あたしが1人残っとります、ここで。

私は昭和48年に認定されて、それから（昭和）59年まで川本さん（川本輝夫さんのこと。水俣病患者運動のリーダー）と一緒にやとった。（昭和）59年から平成8年までは地区の行政区長をしょりました。行政区長ていうのは役場と地元のパイプ役ですたい。その間、12年間はこればかりに没頭しとって、水俣病の方（患者運動）には出とらんとですよ。その間やっておれば、何でもわかるとばってんが、その12年間は空白があったでしょ。全然わからんわけじゃないけど、直接携わとらんとなかなかわかりにくいです。

行政区長をやめて1、2年したら川本さんが亡くなったでしょ（1999年2月死去）。川本さんの後の水俣病患者連盟の委員長を私に、「お前がやれ」て皆が言い出して。こりゃまたえらいな事を私に持ってきてくれたなと。私はだいぶ断ってきたんです。でも、どうしてもということで、いまちょうど10年目になります。（会員数は）今でだいたい70人切とらせんかな。1番多かったときは270～280人おったんじゃないかな。

小学校は女島尋常小学校です。それが4年生ごろやったですか、国民学校ってなったのは。国民学校初等科第6学年って言いよったです。高等科には行かんかった、やってもらえなかったです。

卒業するや否やすぐ出水の方に2年くらい、漁師の見習いに出されたっですよ。数え年の

14、今でいう13歳ですかね、行ったわけです。遠い親戚の人が網元でおったもんですけん。そこでまあ2年間くらい見習いをして、勉強して帰ってきたです。

普通の場合は親の漁を手伝うばってん、私の場合は、親父がおらんかったから、行こうとすれば小崎弥三の所しかなかったわけです、弥三と私の親父は親戚やったですから。しかし弥三の所には私の次兄が網子で働いておったわけです。それで兄貴が小崎網元において、私は出水に見習いに行ったというわけです。出水の親戚は今は跡なしです。

親父は漁師やったですが、私もそもそも小学校のときから魚とりが好きで、お金が欲しいと思うたことはなかです。よそに働きに行こうとか、サラリーマンになろうとか、全然考えたことあなかです。とにかく魚をとるのが好きやった。出水に行ったのも、漁師を習いたいという気があってですたい。漁師のやり方、いろいろ細かなことまで。その当時は昔の言葉で言えば丁稚奉公、ああいうふうな形です。ほんとに魚とりばかり。魚とりと網造り、これが私のまあ取り柄ちゃあ取り柄ですね。

昭和20年の4月にこっちに帰ってきました。戦時中ですけん、戦争がひどくなって、出水の方でも空襲が激しゅうなってきたもんで、むこうの網元の親父さんが、ちょっともうこれじゃいかんばいと、「こん子は帰さんばいかん。親元に帰さんばいかん」、「どうしても、こらお前帰っとらんばつまらんぞ」ちゅうて、それも汽車で帰るというたっちゃ、昼は空襲で汽車はどこで止まるかわからんでしょ。帰って来られんもんですから、日の暮るるとば待っておって、晩に舟で連れて来てくれたつです。そのころはまだ漕ぎ舟ですけんね。連れてきて、うちのお袋に私を渡して。晩に船で連れてきてもらうたことは、いまだに覚えとるです。

ところが、こっちでも空襲は受けよったんです。機銃掃射だけだけど。飛行機の上から機関銃で。私たちはここにおいて受けましたよ。私が漁師の見習いに行って、帰ってきた年が終戦でしょ、(昭和)20年の4月ですけん。その空襲受けたのが何月だったかな？ 7月？ 6、7月だったかな。田浦に東海カーボンてあるじゃなかですか。会社があるですたい。それと佐敷、あそこは爆弾攻撃受けた。空襲、ここから私は見とったです。すぐそこから見えとるけん。

ここが空襲されたのは、ここに大きな運搬船を、政府が造ったヤツ、200~300トンくらいのやつ、それを何杯も、6艘くらいここに繋いどったんです。停泊しとったんです。それをめがけて来たんです。その船は造ったばかりでエンジンも据えとらん船だったとです。そういった船を避難させとったんですね。そっでなからんば、こがん所が空襲のなんのて(笑)。間違うてひょろっと来た空襲じゃなかです。(アメリカ軍は)その船を見とったんですね。その頃は漁をするて言うたっちゃ、危のうして出られんかった。だから生活も苦しかったです。

帰ってきてみたら、男ちゅうのは誰もおらんとですよ。私がたった1人。数え年16歳の少年が1人。小崎弥三もちろんおらんとです、みな兵隊や軍属に行ってもうて。小崎弥三の兄弟も5、6人おったですけど、全部兵隊に行ってもうて。男はおるとはおるばってん、兵隊にも行かれんごたるとですたいね。身障者は兵隊にゃ行かれなかったですから。その頃は45歳くらいまで兵隊にとりよったけん、50、60（歳）になった人たちしかおらん。青年は私1人じゃったです。私より1つ下はまだ学校の生徒です。中学生、私の上は全然おらんですから、私が1人やったというてよか、（昭和）20年の終戦ちょっと前から終戦までは。

小崎弥三が兵隊行つたつが、たしか昭和18年じゃったち思います。終戦になってから帰ってきたから、まる2年ぐらい行つとったじゃなかですか。その間は小崎弥三の親父や、うちの家内がまだ家におって、うちの兄貴もそこに行きよったわけです。そのあとうちの兄貴は軍属に徴用されて船に乗りました。私より1つ多い人は全部軍属とか行つたし、その頃は数え年の17で軍属に取られよったです。で、私は終戦の年が数えの16だったから、軍属にも行かんし、兵隊にももちろん行つとらんとです。

私はふの（運が）良かったつです、あと1つ歳が足りんかったばかりに、軍属にも行かんちゃよかったし。軍属行つたり兵隊行つたりしとつたら、私はここにはおらんやったかもしれんて（笑）。

私の親父と小崎弥三の親父は従兄弟同士なんですよ。小崎弥三の家が網元やったもんですから、（昭和）20年に私が帰ってきたときは、そこで働こうちいうことになったわけですが、小崎網は男は誰もおらん、私と家内の親父（小崎弥三の父）の2人。それで、今の家内はまだ本家におりましたから、家内と家内の女きょうだいと地曳（網）（以下、地曳は漁法を指す）をしよりました。女ばかりですたい。だけん男のする仕事は全部やらされたです。私はずっとここにおるから、そういうことを知つとる。しかし、兵隊に行つた人は実際はわからんでしょう。ここにおらんとだけん。知つてるのは男の中では私1人でしょう。

夏場は私と女たちで地曳網ですたい。終戦後は冬場になるとボラやコノシロを、ここでとれる間はここでとるわけですが、潮流によっても、また季節によって魚の動きが違いますけん、魚を追っかけて水俣方面まで行きました。動力船でなくて漕ぎ船ですよ。水俣の百間の浦あたりにまで行きまして。少々時化たくらいでもまだ仕事ができよったもんですから、百間の浦は。今は百間町ですかねあそこは。私らは百間の浦と言ひよったけど。そこまで行つて1週間とか10日とか泊まりがけで漁をするという、そういったやり方を何年も続けとつたわけです。そのときは2年間出水に見習いに行つて、いくらかためになったわいなあと思ひました。

2 オヤジ還る

小崎弥三が兵隊から還つてきてからは、その下で漁業をやつたわけです。私どもはオヤジ、

オヤジち言いよったばってんか。終戦前というのは1年か2年の間漁がでんかったでしょう。空襲なんかひどくて。それで休んどったからじゃなかつかなあ、魚はものすごうとれよったんですよ。それからこうじわーっととれんごつなりました。昭和20年代の終わり頃にはちょっと厳しくなってきたですな。



小崎弥三網元（1949年）

ここの村で天草から来たというのは、京泊側にはおらんとあるけど、池尻のほうにゃあるみたいです、これは聞いた話ばってんが。京泊には釜姓、小崎姓があっでしょう。女島に釜とか小崎という土地があります、そこからこっちに移り住んどる、そう聞いたことがあります。

だいたいここらへんは、網元がおるでしょう、その網元のもとでみんな働いとったわけです。網元はこっちからいくと小崎弥三でしょ、今はサダコのうちです。弥三と私の親父は親戚やったです。それから井川太二さんも網元です。それから浜田岩男さんでしょ。小崎義三さんとこもです。そすところの方が釜貞男さん。それから吉永正彦さん。それから池尻のほうに行けば緒方正人君の自宅があって、スズコさんところがもとは緒方福松さんの網元です。スズコさんは福松さんの息子の嫁です。そすところ（それから）ここが信一、緒方徳三郎

ていいよった。それらから緒方重義、もとは緒方弥助さんという網元やったですよ。重義は信一のところから養子に来とるから、重義と信一は兄弟ですね。みんな息子とか孫ばかりですね今は。

井川さんと浜田さんは「もやい」で、巾着網ばやっとなしたです。親方同士でお金出しあわせて共同事業です。一時期は緒方信一君とこ（徳三郎）も井川さん、浜田さんと「もやい」でやっとなしたこともあるです。だから巾着（網）（以下、巾着は漁法を指す）の場合は地曳網より網元の数が少なくなってます。9軒あったけど井川さん、浜田さん、緒方さんが「もやい」でやっとなした関係で7軒になっとなした。だから巾着の場合と地曳の場合は網元の家数が違うとですたい。網元ていうのは陸^{おか}で言うなら土建業の親方、そういうようなもんです。

地曳、巾着の当時は、自分たちは網元を中心にして、そこで働いておったでしょう。巾着網の頃なんか20～30人ぐらい働いとった。1つの網元でみんなが兄弟とか同志みたいな格好で仕事をしとる、それがほとんどです。どこの網元のモンでもそがんです。それが6軒も7軒もあったわけです。ず～っと同じ顔ぶれでほとんど親戚同士、親戚同士が網元に働いとるようなかたちで、子供のときからあそこの網元に行くもんだと決まっとなるようなもんで、網元から網元に移るといこともなし、ほとんど動かんです。別に係長、班長がおるわけでもないし、皆同じです。ほとんどの人が船を持たずに、網元におって働いて、とってきた魚を食べる。ですから、この村の人達はほとんど同じ生活ばしよった。分けてもらう金も同じやっで。「この人は上手やっでうんとやる」ということもないです。そうした差はつけられんでしょ。だからそういきり立つようなことはなかですよ。古くから地付でおった釜さんとか小崎さんとかと、明治以後に移ってきた人があるですが、その間にも違いはないです。ですから、共同精神ていうのが非常^{おたが}に強かったと思う。今でも、私らの年代ぐらいの人たちはその名残はあると、「御互い」という考えがあると思いますよ。若い人たちはわからんですけど。

その当時はどこも地曳網が主流で、私が物心ついたときはもう地曳網はあったですよ。芦北で言えば地曳網と打瀬網ですね。女島は打瀬はないです。こくら辺は打瀬船は計石ですたいね。ただ、出水の方じゃ打瀬船はだいぶおったんですよ。名護ですね。あっちじゃその当時打瀬船が何10艘でおったで、名護は打瀬のたまり場じゃったですね。名護に行くとき港が2つあるでしょ。今は外にいっちょできとるばってんが、その前に小さかとの2つ。あの2つにいっぱいおったけんですね。

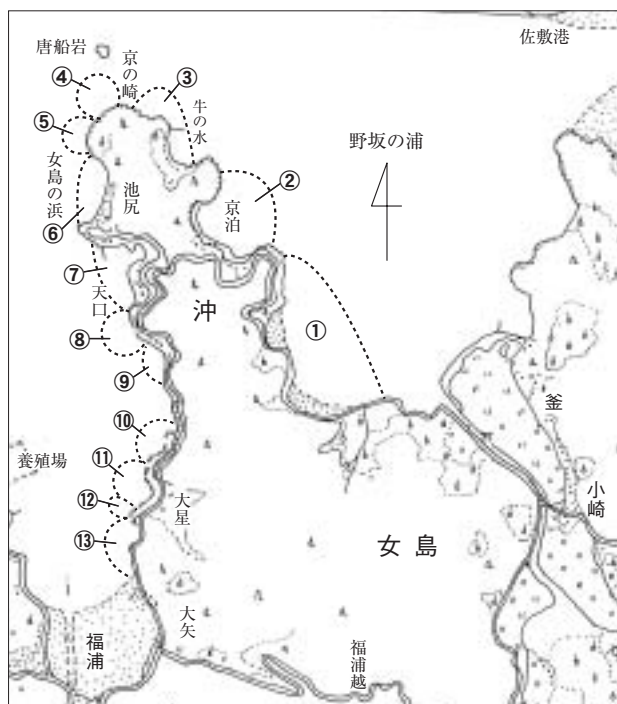
地曳網の漁場は網代^{あじろ}ていいますが、こくら辺では5つに分けてあった。なぜ5つかというと、網元が5人おったでしょ、だからと思います。それを廻わり番こ、網代は毎日替わり番こです。たとえば1の網代、2の網代としますね。最初くじを引いて1の網代に当たった人は明日は2の網代に行かんばん、そういうふうに。そげんせんと不公平になるじゃなかですか。網代によって魚がよくとれる網代と、あんまりとれん網代とありますけん。

網代は決まっ時はくじ引きですけんね。たとえば夏場なら夏場までず〜っと地曳網やるじゃなかですか。そすと秋口になると休みに入る。それでその年の順番のままで翌年もやっていくわけじゃなかです。正月とか3月とかに、また網元ばかり寄ってくじ引きして、そして網代は決むとです。網元同士の間を取り持ちたりする者は誰もおらんです。場所の悪かもんは、他の場所でその日どんなに魚が多くても、自分は遊んどらんとしようがなかとです。網代は一度決めると、一応その時期が終わるまで、次にくじ引きするまではそのままです。正月とか3月とかに決まっとるわけじゃなかです。1カ月とか2カ月とか長くとれたり、早くとれんごつなったりするけんですね。そうすと網元同士で、そろそろくじ引きしようかということ。

網代に当たった人はその中では何の漁をやってもよかけど、もともとは地曳網の権利として決めるとです。だけん巾着になると網代は関係なくなったわけです。1つの網代を1人に任せてそれで飯が食えとったんですね、昔は。ところが私どんが覚えたころ（覚えているころ）には、そげんことしよったっちゃ飯は食われん時代になっとったですね、もう。

網元同士で、あすこばかりとれとるとか、そういう話はあるよったかな。網子同士では

図1 女島沖集落の網代図



注) 松崎忠男氏に確認した網代場を記入

- 網代場は、
- ①魚網代、
 - ②京泊網代、
 - ③牛水網代、
 - ④足形(跡)網代、
 - ⑤新網代、
 - ⑥池尻網代、
 - ⑦網曳網代、
 - ⑧東泊、
 - ⑨天口網代、
 - ⑩野々島網代、
 - ⑪大星網代、
 - ⑫鞍網代、
 - ⑬大矢網代、

の13カ所となっており、1921（大正10）年当時と比べると、牛水地先池尻網代がなくなり、代わって新網代と網曳網代、大矢網代が増えている。¹⁾

1) 熊本県系葦北郡水産会『熊本県葦北郡水産基本調査』1923年

「あすこにゃ（あその統には）負けたバイ」という話はしよったですが。とれ高をね、見とってわかるけんですね。網子同士では話よったけど、網元同士ではまずなかったと思うですが。案外仲が良かったっですよ、こっちは。それで、この水俣病問題にしても、そういう昔からの名残が心のどこかにある、そう私は言うと思います。

地曳網は、手漕ぎの場合は、^{あみぶね}網船になれば2、3トンある船です。^{もやいぶね}網船は舫船ですけん2艘いります、だいたい6人から8人、片一方の船にね。親方の乗る船は小さい船で0.5トンぐらいしかなかです。それに1人か2人乗る。「テブネ」で言うたっちゃわからんどばってんが、「手船」で書いて、^{しきせん}指揮船という方がわかりやすかかな。これが網元が乗る船です。地曳網の場合は昼だけですが、集魚灯は必要なかです。地曳網ちゅうのは昼だけです。巾着網になると晩やるから集魚灯がいとです。

地曳網の網代、漁場は限られとるんです。女島は女島でこの辺だけ。佐敷湾内。^{おか}陸から網を引くから遠くには行かれんじゃったですけど、その当時はそれが大きか仕事だったですね。魚が多かったけんです。地曳網の時代は魚群探知機もなかったですから、魚の群を見るにはみんな山の上から見よったです。山の上に登ればよく見えますもんね。ここらへんならこのうの後ろの山です。

女島では地曳のころの漁はやっぱり現物支給です。オヤジがくれるだけ。オヤジが「今日はこれだけあるけん、こしこやらんばん（これだけ渡さないといけない）」ちゅうて分けたんです。歩戻しとかそういうこともなし、こっちも要求もせんし、向こうも言わんし。分けるのはほとんど平等でした。仕事の内容によってでこぼこがあるということも、ほとんどなかったです。地曳にはあまり分担するほどの役割はなかったですもん。イワシをもらってイリコに作って、自分たちでなんとかせいということです。ただ、巾着になって佐敷から来てもろた網子連中には、魚がとれんかったときには、オヤジがいくらか金をやりよったっじゃなかですか。巾着になると網がふとか（大きい）もんだけん、いろいろ役割を作ったかんて漁ができんから、係ができて、責任や仕事のできできんで差がつくようになったですもん。

そして戦後、網元の人たちがもうちょっと大きな仕事をやってみようということになって、巾着網が始まったんですよ。それまでは地曳網でチリメン、チリメンにはふたつあって、カタクチのチリメンとマイワシのチリメンと。カタクチの小さかやつはタレちゅうて、マイワシの小さかやつはヒラゴて言いますもん、ヒラゴのちいさいやつもチリメンです。どっちも地曳で取りよったです。巾着が入ってきても地曳網も曳きよったです。巾着は月夜はできんですから、その間に地曳を曳いたり網の手入れをしたり、両方の網が備えてあったわけです。

地曳から巾着の間に1年間八田網をしりました、これも最初小崎弥三がはじめたです。

そこにみんな行きよったんです、巾着のときと人間のメンバーは変わらんとです。網が違ただけで、それで、どうしても八田網では巾着のように取れん、取れ高が少ないちゅうようなことで、これは1年やってやめたです。2年目には巾着網に変えたですもん、その頃まだ2番目の兄貴がおって兄貴が小崎網に行きよったから、私どんな八田網は自分ではやっもらん（やっていない）です。昭和24年に兄貴が死にました。それまではほんの半年ばかりですが、私ゃよその網に、井川（康雄）さんの共同でやりよらした網に行きよったです。（小崎）弥三が八田網をやったときには井川さんはもう巾着をしょったんです。八田網は（昭和）24年の夏までやって秋からやめたです。それで24年に兄貴が死んだもんだけん、私がすぐもとの小崎網に秋から戻ったわけです。

八田網は小崎茂義さんが同じ時期にしりました、ここの八田網はその2人です、（小崎）茂義さんと（小崎）弥三は親分同士仲が良かったですもんな、親戚筋でもなかったですが。「やってみろかい」ちゅうようなことで、茂義さんも（水俣病に）認定されて……、その当時の網元は全部認定されてますな。



八田網の頃の小崎弥三網（1949年）

巾着がはやり出す前は冬場は水俣湾に行きよりました。オヤジが兵隊に行く前からそうしよったですから、戦中からの話です。ボラとかコノシロとかですね。冬場はこのへんは魚が少なくなるんで、水俣湾の方が魚の多い時期です。いちばん行きよったのは漕ぎ船のころです。行って、ちょっと時化たりすれば帰ってききらんでしょう。それで明神あたりに泊めてもろうて1週間も10日も行きっぱなしですたい。

とったボラやコノシロなんかは、丸島の市場にあげました。港に行って船を係留したりするでしょ。そすとやっぱし「少しぐらいこの組合にも揚げとかんばなあ（揚げとかないとなあ）」「顔ん悪かばいなあ」ちゅうようなことで。寝泊まりだけそこでして、魚はよそに持っていくということは、なかなか具合の悪かもんだけん。だからそういうこともたまにはやりおったですよ。

私が出水におった頃でも出水の方からも水俣湾に来よったです、やっぱり冬場です。だいたいどこも冬場は魚が少なくなるけども、水俣湾は冬でも魚が多かったですね。なんででしょうかね。

ボラちゅうとは夏はだめです。夏でもボラはおりますよ、ばってん夏は飛ぶです。ぴょんぴょん飛ぶとですよ。それで、群を見とって囲うでしょうが、飛び出てしまいます、追えば。夏は10分の1 かかればよかところでしょうね。冬はその逆ですね。鈍くなっとるです。そういうわけで、ボラをとるとには冬でなからんば、夏はちょっと。それで、ボラとかコノシロは夜は夜光虫で見分くるとですよ。月夜には見えんとですが、闇夜には銀色に光るとです。夜光虫の動き方によってこれはボラの群、これはコノシロの群てわかるとです。むかしの魚群探知機ですな。これは遠くからは見えません。船が近くに行って、群に当たらんばわからんですね。

巾着になってからも、網が時期的に休みのときもあるでしょ。そのときに遊んどるわけにはいかんもんだから、ボラ囲い網に行ったり、磯立網いそたてあみに行ったりとか、水俣湾に行ってしよったです。冬場なんかやっぱり泊まり込んで行きよったですから。小崎弥三網の網子が組んでやりよったです。みんな勝手にそれぞれ漁をしたわけじゃありません、親方の指示に従ってみんなですとです。

その当時ボラ囲い網は、あまりふとくない（あまり大きくない）船、0.5トンかな、それくらいの船3艘でやりよったです。網船2艘に3人ずつ乗って、それと手船、指揮船ですたいね、それが1艘で3艘7、8人でやりよったです。その1艘として私も船を造ったわけです。自分1人で行くよりも、船も出しとけば、船にもワケチ、ワケチちゅうのは分け前ですね、それが入ってきますけん。

水俣に行く場合にゃ明神、知り合いがおったんです。いま水俣病の語り部に大矢理巳子さんておるでしょ。あの人のじいちゃん、大矢安太さん、あの人と一緒にしたこともありますよ。別に一緒に漁をしたわけじゃないですけど、ただ泊めてもらっただけですけど。泊めてもろたところにお礼をあげよったか、そこまでは私はわからんばってん、親方がしよったんじゃなかろうか。私どんな（私たちは）ただついて行くだけで、相手先との話は親方がしますけん。それこそ親方日の丸ですたい。

水俣湾によそから漁に来て、むかしはお互いで大目にみよったです。たまには沖でケンカしたりもしよったですばってん。「ここは我々の縄張りだけんちっと遠慮せんかい」ちゅうようなことで。水俣あたりの人たちは私たちのような漁師専門ていう人は案外少なかったっじゃなかでしょうか。チッソなんかに勤めとって、その傍ら漁に行くちゅうような人がおったんじゃないかと思いますな。そんなことで私たちより関心が薄かった、ま、そげんでばかりもなかろうばってん。そういった人たちはかたわらでよかばってん、私どんな是が非でもこれでなからんば飯が食われんごとなるけんですね。

3 巾着網の登場

それから網が大型化する時代がやってきたですな。巾着網がこっちにはやり出したのは戦後で、私の記憶じゃ昭和24年じゃったと思います。

巾着は地曳網を沖に持って行ったというのとは違います。網が全然違います。これは集魚灯で魚を寄せといて、網ですくってとる。すくってとるちゅうても、ものすごい大きな網ですけんねえ。網の幅なんか500mくらい、長さが2,500mくらいの網ですけん。集魚灯で魚を集めといて、その集魚灯をぐり〜っと網をまわしてとりかこんで、集魚灯に集まるとるカタクチを、底の方で網を絞ってしまっという網を揚げるとです。魚が逃げんように絞ってしまっというです。

巾着網というのは、どこからその言葉が来たか、むかしのバアさんたちがお金を入れてブラブラ下げてされかす（出歩く）じゃなかですか、あれを巾着というでしょ。巾着という言葉は網の口を巾着のごと絞ることから来とるんじゃないから。そこで絞る場合には、私どんな、あれは「カグラサン」て言いよったけど、網を人間の手で巻き上げるローラーみたいなやつ。ワイヤーで下を絞っていっぺんに揚げるとです。それで漁獲量も増えた。昭和20年代は漁業は豊かだったです。

巾着やった時期はだいぶ長かったです。14、5年ぐらい続いたですもんね。小崎網のピークのときは、ボラ囲い網の船もあるし、巾着網の船もあるし、地曳網の船もあるし、合わせて10艘ばかり持っとったじゃなかろうか。ピークていうなら昭和20年代から30年代前半ですな。

地曳から巾着に変わってくると、巾着ちゅうのは網がものすごくふとか（大きい）もんだけん、網を海に入れる場合に、この人がこの専門、この人がこの専門というぐあいに（役割を）決めとったです。だっでんかれでんしよったら大変なことになるもんだけん（誰も彼もが勝手にやってたら大変なことになる）。お前はどこ、お前はどこと、ちゃんと決めて。船頭とか、オモテ役とか、トモ役とか。オモテ役とは補佐役のことで、網のおも錘りの方を入れる役、浮きのついた方を入れるのはまた別にあります。名前は……いまわかりまっせん。錘りを入れる方が難かしかつですよ。

それによって、責任が重い係とか、責任が薄い係とかあるもんだから、「あの人はこの役をしてもらおう、この人にはこの役をしてもらおう」というふうにみんなで話合うて、オヤジとも話し合うて、決めよったです。親方が「お前何しろ、かにしろ」というのじゃなかです。話合いが多かったですよ。

それで仕事の出来る者と出来ん者とか決まるというふうなことで、その役割に応じて、とれ高によって歩分けして手当ちゅうか「ワケチ」をくれよったです。役割によってワケチはいくらかずつ違うたけど、そのときに「ボシ」というとです。1人ボシとか1、2人ボシとか。たとえば、計算して割ってみたら1人1万円になったとすると、機関長は2分増しとかいうことです。「ボシ」ちゅう言葉の意味は何でしょうかね、これは日本語じゃなかなか伝わらんかもしれんですね。1人前、2人前とか、そういう意味じゃないかな。サラリーマンにも給料に差があるでしょ。あれと同じじゃなかつたかな（ないのかな）。今思えば、地曳から巾着に移るのはサラリーマン的になって来るような感じもするですね。

巾着では女も船に乗るこつもありましたよ。手が足らんもんじゃで。阿久根（鹿児島県阿久根市。不知火海の外側に位置する）に行きよったときも飯炊きなんかもいるでしょう。2、3人頼んで一緒に船に乗って行きよったです。そして手のたらんときには沖にも出て行きよったですたい。巾着の当時はどこでも手がたらんかったでしょう、おそらく。それで、あっちこっちから人間を拾い集めて。

この辺の網子でよそから頼みよったちゅうのは、巾着網だけですね。巾着網のときには1つの網、1統に30人から人間が要りよったでしょう、だからこの狭いところで6統も7統もおるんだから、30人ずつというとな何百人となるから、よそから頼んでこんとね。だいたいここは佐敷からです。頼むのは伝えで、頼んでくれんね、というふうな。来てもらうのは1闇1闇です。闇ていうのは1回の漁期で月のうちの20日くらい。あとの10日は月夜ですからね。だいたい月ごとですね。その上で続けて来てもらえる人は来てもらう。2、3カ月来て、もうやめようかと言うてやめていくと、またどっかに頼む、そういうやり方です。最初の頃は取れ高によって分ける「ワケチ」です。歩合制ですね。

ところがさっき1人ボシとか言うたけど、こっちの女島の人たちはもともと網に慣れとるでしょ。そすと計石の人たちは初めてじゃないですか。そういった場合にはやっぱり、こっちの人たちと同じちゅうわけにはいかんがな。1人で2役する人もおれば、たまたま来てくれた人の中には、1人前もなかぐらい（1人前もない程）の人も中にはおるし、そこらへんは少しの差はつけんとですね。半人前の場合は半人ボシて言いよりましたよ。

4 阿久根沖

船の動力化が始まったのは昭和23年か4年だったと思いますがなあ。我々はその頃は動力なんて買いしらんやったです、網元でなからんば。べつに動力を入れたところに負けだした

からというわけでもなかですよ。このへんでは、誰が早かったというより、巾着の親方はみなほとんど同時ですたい。お互いに様子を見ながら、「あれがしたから、オレもしょうか」ちゅう具合で。そもそも、新しいもんがきたらとにかく取り入れるちゅう感覚がありますもんね。魚群探知機なんかもね、「あれが魚探^{ぎょたん}ば買うたちばい、オレも買わんばん」ちゅうふうで。成果に差が出るとかいうまえに「とにかく買わんばん」ちゅうふうですたい。人がするときには自分もせんばんからですね（笑）。

以前は水俣へんに漕ぎ船で行きよったけど、親方が動力船の小さいのを買うてからが楽になったとです。水俣なら水俣まで、モマ船（茂間船＝手漕ぎ船）を3艘でも4艘でも必要なだけ引っぱって行くようになったから。その前は自分で漕いで行かんばんじゃったでしょうが。潮の流れが北から南、南から北で流れますけん、ここから「連れ潮」ちゅうて潮にちなんで漕いでいって出水まで6時間。ここから満潮でこぎ出すでしょう、そすと向こうに着くときは干潮ですよ、満潮から干潮までかかります。帰りはその反対ですたい。出水から帰ってくるときは満ち潮に、こっちから行くときは引き潮に。それを利用して漕ぐとやけん。水俣までは3時間ですね。

その頃は網船にはエンジンがなかったから、曳船^{ひきふね}で曳いて。その曳船の船頭を私がして、岩本廣喜が機関長やったです。これが2艘あるけん、もう1艘の方にも機関長もおる。まあ、船長ちや言わでにゃ舵手^{だしゅ}て言いよったですがな。私が舵手だったわけです。船長というしこ（ほど）はなか、たった2人乗ととやっで（笑）。1人は機械を専門にやるし、私は舵を操るわけです。船頭と機関士ではボシは変わらんです。そこまでしてしまえば、網子同士おもしろなかでしょう。

魚群探知機なんかが入ってきたんで、魚が少のうなってきたんじゃなかろうかと、私は思います。魚を逃がすということがもう全然なかですから。巾着の場合にはほとんどオヤジのカンですね。場所を探して、集魚灯でイワシを寄せて、とる、ということですね。自分たちで漁をはじめれば、自分のカンです。

そういうカンのいい人悪い人もおるけど、漁師の駆け引きちゅうのは面白いもんで、駆け引き使わん漁師はおらん、ほとんど駆け引き使います。漁師が「夕べはとれた」「昨日はとれた」ちゅうような話をするときには、「あの人が山ちゅうたときは川で聞いとらんばんとぞ」というとです。あすこでとれたとかまっすぐ言えば、みんなが行くからねやっぱり。あの人はよくとるという人と、イマイチだなという人はおります。年中とおして漁をする人と、漁が案外少ない人とありますもんね。それは出漁日数もありますが、そればかりじゃなかでしょう。判断の違いみたいなものもあります。大群とか、群が小さいヤツとか、とれてきた魚を見れば分かる場合もあるとです。この魚は大群じゃったばいとかですね。その魚をとった人は大群を見つけとるわけばってん、そのへんは絶対教えんですな。

阿久根に行きはじめてときは、みんなで話し合ったわけじゃないです。オヤジが「こっちはあんまり漁もなかごとあって、あっち行くぞ」ちゅうようなことで。オヤジが行くとなら行かんばしょうんなかたい、ちゅうようなことですたい。いちばん初めに行きはじめてのは小崎茂義さんのごとあった（ようだった）。「あっちで取るけん、おまえどんも来い」ちゅうて親方同士で、たしかそげんのごとあったですよ。

阿久根に行くようになったのは、昭和何年ぐらいやったかな、不知火海のカタクチが少なくなつて、カタクチを取りに外に行くごてなつたつです。不知火海で「取れんごとなつたなあ」ち思いはじめたのは、いつごろやったかなあ。

チッソに我々が抗議行動を起こしたでしょう。そんな時私どんな阿久根から来たですから、抗議行動に参加するのに。それが昭和34年だから、阿久根に行きだしたのが昭和30年ごろじゃなかつたかなあ。私どんが結婚したのが昭和27年、最初の子供が生まれたのが昭和28年でしょう。その当時「これから子供を育てにゃならんのに、困つたな〜」という感じがあつたですから、その当時にはもうとれんごとなり始めたつでしょうなあ。そっだけ阿久根から帰つた合間々々には自分の仕事ばする、いわゆるカシ網。巾着は闇夜だけに行くでしょうが。そうすつと月夜は10日間あるでしょう。その間はカシ網で補うということです。自分たちでする漁はほとんどカシ網でした。網子はほとんどみんなしよつたです。

五智網ごちあみを作つたのがたしか昭和42、3年でしたもんね。その前にモマ船を2回造りかえたけん、2回ちゅうことはたぶん10年ぐらい経つとつたんじゃなかつたかなあ。（昭和）32、3年ごろに最初のモマ船を作つたと思うがなあ。この船は小崎網でのボラ罫にも使うし、自分のカシ網にも使いよつたつです。そういった時期が何年かあつたですもんね。不漁の時にオヤジにばかり頼つとるわけにもいかんですから。だいたい網元は、網子たちが自分で漁をするのはいい顔はしよらんだつたんですが、その時にはオヤジも黙つてやらせよりました。せんことには（個人漁をしないことには）10日間は何もせずに遊んどらないかん。そうせんば生活が立っていかんやつたつたいな。

若いときというのは、肝っ玉の太かつたかなですか。昭和42、3年頃ですか、私も借金して船を造つたことがあります。3トンくらいの船ですがね、「ようこげな船ばつくな〜」て思ったこともあつたです。そのころはお金の値打ちがあつたから、100万もあれば、今の1,000万以上の仕事ができよつたです。お金は漁協から借りたり、その当時は、近代化資金ちゅうのがありよつたんです、県から出よつたのが。そういった金を借つたり、エンジンを月賦にしたり、いろいろ工夫しました。魚もとれよつたのもとれよつたつでしょうねえ。その頃で100万ぐらひかけて造つたつでしたが、借金払いが1年ですんだですから。

阿久根ではカタクチだけじゃなしにアジやサバなんかもとれました。カタクチはこっちのようなこまか（小さい）とはおらんで、ふとか（大きい）ですね。ヒラゴとタレゴといえはタレの方が高かです。タレよりもヒラゴの方がふとかですたい。ヒラゴはマイワシの子供で

す。ヒラゴがメザシくらいの大きさですね。よく牛深へんでイワシがとれるて言うでしょう、あれはほとんどヒラゴの親です。マイワシですね。タレはふとくならんとです。タレはふとかつで10センチ、15センチあるのはおらんでしょう。

阿久根を根拠地にして、北は牛深のあたり、南は川内沖まで行きました。行けば1 闇20日間は行きっぱなしです。そして月夜になれば漁ができんけん、帰ってきて網の手入れに船の手入れ。合間に自分の漁。

1 年中行っとるわけじゃなかです。1 年のうちで4、5 カ月行ったりとか。カタクチをとるには5 月頃から10 月頃までですね。アジとかサバはそのイワシと一緒に入っとるわけです。冬場2～5 月頃はカタクチはチリメンですもんね。チリメンが大きくなってからカタクチイワシになります。女島では冬場でもカタクチがとれよったんですよ。阿久根の方でも冬場でもカタクチはとれるばってん、冬になると外海だけん時化が多かでしょう。向こうの時化ちゅうとは不知火海とは違います。あっちの波はこの不知火海の波とは違いますけん。ひどかときなんか、船が並んで走っとるでしよ。波と波の間に入ったなら、「あら相手がおらんが！」ちゅうようなことです。今度はお互いが波の上にポカッと上がれば「あ、あすけおった」（あ、あそこにいた）ちゅうふうで。そういった時化にも何回も遭いました。「もうこりゃ帰り着かんばい」て思ったときもあつたです。そりゃあ外海と内海は違います。そういったことで、冬は割が合わん時期なんです。

それで阿久根に行きよったときも、冬場は水俣湾でボラ囲い網をやりました。巾着が入る前にも冬はボラ囲い網をしよりましたから。冬場もずーっと巾着をやりおったのは、巾着になつたはじめ頃だけです。

女島からは小崎弥三、井川、浜田、小崎茂義、緒方徳三郎、緒方福松の網が行つとつたと思います。そのほかあっちこっちから来とつた、津奈木とか長島へんからも来とつたです。全部じゃ10 何続かおつたんじゃなかでしょう。

井川太二さんとか池田政男君とかは、はじめ対馬の方に行きました。イカ釣り、釣り漁でしょうが。釣り漁はどこでん無許可でやってよかという感覚があつたんです。そういった感覚で行つたんかなあと思って。あれは長く続かんかった。私は行かんかったです。

阿久根に行くときにはこっちの網元の続がそのまま行つたです。小崎弥三網に20 人なら20 人おるでしょう、その人たちがそのまま行く。20 人ぐらいじゃ足らんもんだけん、足らん分を向こうでも網子を頼むというかたちで。そこで最低賃金を保証するやり方が入って来たわけです。あっちじゃ、そういう賃金を保証するような頼み方をせんと、とれただけ分けてやっても、なかなか来てくれんかつたんです網子に。あっちじゃ勢子とか、乗子とか言いますが、みな網子のことです。たとえば1 万円なら1 万円、計算してそれ以上揚がるならばそのワケチを上積みして、そういうやり方をしよつた。我々はそうじゃなくて、ワケチでばっ

かり、最低賃金なんて貰うことはなかですもん。だけん取れ高によるとですたいね。ただ、食事は我々の分は「向こう賄い」で、必要経費で落としていっとったです。阿久根の方の人たちは食事は自前だったですな。

ワケチの部分は私どんと向こうの人とは割合は違います、私どんは漁に慣れとるけど向こうの人は慣れとらんでしょう、それはワケチは当然違います。私どんが1.5なら向こうの人は1.0とかですな、だから向こうの人たちは最低賃金プラス1.0、私どんは1.5だけ、それでしまいちゅうわけですたい。漁獲がえらい多ければワケチで向こうの人たちより多くなるけど、漁獲が少ないと向こうの人たちの方が手取りが多い、そういう場合も結構ありよったです。不漁の場合は我々はこたえよったんです。それでも人手がたらんもんだけん、そういうふうにせんば仕様なかったですたいね。仕事ができんもんだけん。

阿久根でとった獲物は向こうの市場にあげました。1 闇20日なら20日行きっぱなしじゃったけん。あっちはちゃんと問屋もあるし。市場は夜中に持って行っても起きとらんでしょう。巾着は夜中の漁でしょうが、鮮度がいいうちに出したいけん、夜中に持って行くときもある。その場合は問屋に直接。問屋も市場の入札権は持つとるから。昼は市場に全部出してですな。

網の収入が減って来たときの数字なんか、私や、やめる3、4年前から会計しとったばってん、覚えとらんですな。1 闇毎に収支は出すわけですが、あんまり赤字ちゅうことはなかったです。ただ我々がもらう分が少なただけで。赤字なあ……、網元自体が収入が赤字ちゅうことはあんまり……ただ網子の収入がごとと少なか、あたしどんのもらい分が少なかわけですたい。そげんことはたまにはありよったです。よ。

阿久根には7、8年は行ったです。よ。あっちは東シナ海じゃけん、漁場が狭いとかいうことはないです。ばってん最初は近くでとれよったけど、あとからは遠くに行かんととれんごつなつたですな。小崎茂義さんなんか志布志湾のほうまで行かしたそうです。よ。それからみんなだんだんやめていったごとあるですな。それで、ここもダメばいなあ、と考え出して2年か3年かで私どんもやめたです、あとはこっちに帰ってきて、あらたにまた地曳網をはじめたです。けど、長うなかつたですもん、地曳網をはじめてからオヤジが病気にひっかかる（病気を患う）まで。長うなかつたもんなあ。

5 オヤジ倒れる

巾着ができんようになってから、網子の数も減って7、8人残ったですもん。それだけの人間で地曳網をやったです。もとの巾着の始まる前に戻った、ちゅうごたるふうですたいな。地曳網なら設備もいらんし人間もいらんからね。巾着はやっぱ30人くらいおらんとでけんですが、地曳網はこしこしか（これだけしか）人間がおらんといえ、そしこでなんとかできますけん。その頃は船で曳く地曳だったですな。あれは何て言いよったかなあ、たしか機船きせん

ふなひき
船曳で言いよったかなあ、私やその許可証は見たことなかったもんだから。阿久根をやめて帰ってから水俣湾にボラ囲い網に行きよったというのも、だいたいさっき言うた7、8人くらいで行きよったわけです。岩本廣喜、小崎^{とめた}留太、生島広光、小崎光男、池田太吉、池田正男、長船庄太郎、岩本敏男、といった人たちで、まあこの顔ぶれが小崎網の中核部分だったというてよかでしょうな。あと他の地域から来とった親戚筋の人が2人くらいおったですね。そのうち1番最後まで残ったのは、長船庄太郎に私、小崎留太、留太はオヤジの弟じゃって(笑)最後まで残ったですたい。小崎光男、岩本敏男、大将も最後まで残ってくれたもんなあ。

地曳に戻って間もなくオヤジが病気にかかったでしょ。オヤジが発病したのが(昭和)40年頃で、その頃にはこの4、5人が残るとるという状態になっとったですな。早かモンはオヤジが倒れる前からやめたモンもあります。ほかのモンたちもいっぺんにやめてしもうたわけじゃなくて、徐々に、自分の始める漁の時期によって、たとえば五智網はいつ頃、クチゾコ網はいつ頃であるでしょうが。その時期にその都度その都度、ほちほち々々やめていったですたいね。そしてそうこうするうちにオヤジがわからんごとなったもんですけんね。最初はわからなかったですよ、なんであぎゃんことするとやろか、て。変な仕草ばするもんで……あとから次第にわかってきたばってん、もう仕事はできんじゃったですもん。西がどっちか東がどっちか分らんようになって、それでもう指図も何もできんごとなって、オヤジがおらんもんだけん、やめんば仕様なかったですたい。結局網をやめんばならんかったわけですよ。

小崎網の統自体がなくなったのは、親父が(水俣病で)倒れたその年からですから、昭和40年ですかなあ。う～ん、あれからどういうわけで崩れていったか……。わからんばってんですな。オヤジの長男(忠司)が遭難に遭うて死んだのは……昭和34年の7月……じゃなかったかなあ。阿久根の漁のときやったですが、今年が50年忌やったけんですな、長男の。それで跡継ぎがおらんだったんですよ。オヤジにや相当ショックだったでしょう。だいたい私らが兄弟協力してやりよったんですけど、長男が災難に遭うてからが、オヤジもガクっときたという事情もあったごたる気がするとです。一時期は漁にも進んで行こうという感じもなかった。遊んどるわけにやいかんということで、漁に行くのは行っただってんが……。そりゃあそげんなるでしょうたい。次男がおったですが、漁に出たのは最後の2、3年だけで、ほとんど漁はしとらんじゃろう。だからこの次男を中心にして、というのは難しかったつです。次男は小崎網が終わってからは日庸取りに行きよりました。そのあと関東の方に出稼ぎに出て行って、10年か20年行ったままでしたが、2、3年前に亡くなりましたもんな。

網元が漁をやめるまではみんな網子をしょったんです。沖には一本釣というモンなおらんです。戦前はおりましたけど。それでも一本釣だけで生活したという人はおらんでしょう。網子をしとったら生活できてましたから。網子一筋にやっところ、自分で船作って漁を

やろうという気持ちは起きなかった。自分の船を全然持たん時期がありました。地曳、巾着が終わると網子の仕事もなくなったわけです。私の場合もオヤジが病気にかかったもんですから、やめんばしようがないことになったわけです。親方が人も集めきらんとか、日当も払いきらんとか、そういうことでやめたっじゃなかとです。そうせざるをえなかったとです。

オヤジが網をやめると、それからみんなバラバラになって、自分々々で漁をしはじめたんです。私どんの場合は五智網とか、流し網とか、それにクチゾコ網とか、エビ網とか、これら全部ですね。これだけやると一年中遊んで漁ができてよかったです。私は網ばかりです、ずっと。とにかく不知火海でやる網は、延縄と打瀬以外は全部やりましたよ。延縄ばしとらんばかり。私は釣りはあんまり好かんだったもんで。釣りで生計立てることはできんて思うとったもんですから。ここ女島で延縄やったモンはおらんです。いま計石に1人おりますが。以前は福浦にも2人おりました。

五智網や流し網は、手のある人は3人でもしますが、ほとんど2人です。夫婦2人でもよかです。私も家内と2人、2人できつかときに人を1人頼むとかありましたけど、ほとんど2人。人と組んでやることもなかったです。2人で漁も生活もやっていけたからです。またみんながそれぞれめいめいにやったから、頼むちゅうても人手もないし。

むかしトントコ網というたのが五智網のことです。トントコ網というのは我々が使う言葉であって、許可証には五智網で書いてあります。流し網とかクチゾコ網とか五智網、エビ流し網とか、こういうのは知事の許可がいますとです。みな一つひとつ知事の許可がいますとです。操業できる範囲なんかも網ごとに違います。許可証の裏にちゃんと地図が書いてあります。こっからこっちはやったらでけん、ちゅうような具合で。そして2年越しか3年越しで替わります。

網も一つひとつ違うとです。とっかえひっかえ使って。だけん許可がいっちょいっちょ（一つひとつ）違うわけです。漁には時期があってクチゾコは5、6月、五智網は3、4月、それと秋口。流し網の場合は3、4月、4、5月までやって今度はクチゾコ網にと、いちばんとれるヤツをその時期を見てやる。その頃は魚群探知機などあるわけじゃないし、時期と潮を見て。冬は今で言うとい磯立網ですね。冬はセイオ（瀬魚＝瀬にいて動かない魚）をとる。ボラは11、12月頃からあけて2、3月頃まで。寒いときはそんなに飛ばんとですけど、夏になると飛ぶもんだから網にかからんとですたい。今も毎日飛びよります。

6 網のいろいろ

女島へんじゃ網の始まりはカシ網からですたい、もっと前は投網とあみですね。カシ網は1番小さか網ですもん。高さが1.5mくらいかな。そのカシ網の前はだいたい投網専門で取りよったらしかです。カシ網ちゅう網の流行ってきたときには許可がなかったそうですたい。だけん、話によると、投網漁に行っって魚の量を見つければ、船底に隠しといた網をそっと

出して入れよったち、そういう話を聞いたことがあるですよ。あたしどんはそげんことはしたことはなかばってんが。あたしは投網を打ったこつはなかです。投網の樽漕ぎには行っただってんですね。自分で投網を実際に打ったことはなかです。16や17じゃ投網は打ちきらんじゃったけん。その当時のオヤジさんたちはほとんど打ちよったんですよ、本家の小崎弥三やっても（であって）ですね。

^{おか}陸から打つにはそう難しくないけども、船の上から打つのはなかなか、……要領の悪ければ落ちたりするし。投網は下の方が広かでしょう、上はスポッと三角で。だけんあれは全部で長さはどれくらいありよったじゃろうか。3ヒロか4ヒロじゃなかろうか。広がれば6畳まではなかろうけど4畳半以上あったでしょうなあ。いろいろ魚はとれよったけど、主にはエビナーボラの子ですな。わしゃタベ投網の夢を見たが、ああたたちに（あなたたちに）話せちゆうことじゃったんじゃなあ（笑）。

クチゾコ網の場合は長さは2,000～2,500m、余計に使う人は2,500mくらいしよったろうと思います。幅はその頃のクチゾコ網ちゆうたら1mそこそこです。

巾着網は長さが220～230ヒロ（340～350m）くらいですね。幅はどのくらいありよったかなあ……30ヒロ45m……いや50m以上はあったと思います。

地曳網はいろいろあって、綿で作ってある地曳網と縄で作ってあるオドシとは長さが大分違います。綿で言うなら魚網の部分でだいたい長さが350ヒロ（525m）、幅は5ヒロ（7.5m）か6ヒロ（9m）ぐらいでしょうなあ。網の部分まで含めればまだ長かですな。縄の場合はだいぶありよった……よう覚えとらんが……やっぱ300ヒロ（450m）か400ヒロ（600m）あったでしょうなあ。長さは地曳網の方が長いです。巾着の場合は集魚灯で寄せといてとるけん、あんまり長くはいらんばってんが、地曳網の場合は広くなからんと魚を囲いきらんけんですな。長さは地曳網の方がうんと長かですよ。幅はこう巻くから巾着の方が広い。

^{いそたてあみ} 磯立網

磯立網は、仕掛けるやりかたもあるし、囲い網式でする場合もある。冬はマイカ、4月以降はモンコウイカ。今は私はこればかりで他の網はしません。年中でくる（出来る）とです。この目（網の目）の大きさによって大きな魚が入ったり、小さな魚が入ったりするとです。それで、目の小さな網にも大きな魚が入りそうなもんばってん、そぎゃんじゃなかですもんね（そうではない）、魚ちゅうとは。やっぱ目の大きい網には大きか魚、小さい網には小さか魚が入る、妙なもんですよ。まあ、間違うてかかる時はありますばってん。

夕方前、午後4時頃かな、に入れといて、朝夜が明けるときはあげに行きます。これも許可証にちゃんと書いてある。日没から日の出までと、ちゃんと書いてあるです。

イカ網の場合はそぎゃんしよったちゃ（そういう風にやってたら＝日没から日の出までやっていたら）とれません。イカは繁殖期にとれるのがほとんどだから。たとえば網を入れとくでしょう、今日入れとくならば、明日行たちゃ（行っても）あまり入っとらんです。ど

うということかという、これに雌イカがまず入るでしょう。すると雌イカに卵つけに雄イカが来る、その関係でやっぱり2晩くらいなと（2晩くらいは）置かんばんです。繁殖期はマイカが正月、2月、モンコウイカが4、5月から5、6月。私はいまイカばかりです、正月からずーっと今頃まで。

盆過ぎになるとカレイなんか出てきます。それにもこの網を使うとです。カレイの場合には目の大きさが3寸から3寸5分のヤツ、3寸5分を使わにゃいかんとです。目の大きさも決まっとると。イカは2寸7分です。こまかく決まっとるとですよ。まあ、許可証どおりやればとれん、こがんとで魚のとるかい（こんなもんで魚がとれるか）ちゅうごとあるとです（笑）。ちいっとは（少しは）内緒でせんばしょうがなか（しないと仕方がない）。

囲い網

囲い網はボラにコノシロですな。スズキでもチヌでも何でも入るのは入るとですよ。でも狙うのはボラとコノシロちゅうわけです。これは網の式（つくり）はこういった式じゃばってん、大きさがおおきかです。高さがだいたい10ヒロ、15m、長さが1,500mくらい。それを2艘の船で、魚の群を見とって囲うとです。だから囲い網ていうとです。指揮船が1艘で2人、モマ船でやとです。あと網船が2艘で3人づつ。これもモマ船でやるとです。網のふとかもんだけん人間のおらんばでけんがな（人間がいないとできない）。

私どんが場合には小崎弥三が網元でおったわけです。オヤジがボラの網を自分で作って。ボラ網は長さは250ヒロ（375m）ぐらいいかな、幅が巾着のごと広くはないです、10ヒロ（15m）から13ヒロ（19.5m）くらい、だけんボラ網もけっこう値段がかかるとです。

だけど昔は網も安かったですな。巾着網ば作るとに、最初はじめるときには300万くらいあれば足るとか足らんとかちゅうて、話のありよったですもん。私どんなそげん深くタッチしとらんから詳しくは知らんけど。今作るとすれば10倍じゃきかんもん。

いまはボラ囲い網はほとんどやりません。とるモンはおらんです。とっても売れんし、生計も立たんです。8人も出てとって、それを分けよってもね。個人々々でやり出したちゅうこともあってやめたです。昭和40年代前半にやめて、今はもうやとらんです。1つの網にたくさん人間使うというやり方がでけんようになってきたですね。

てぐりあみ 手繰網

手繰網というのは地曳網の小さいやつと思えばいいです。船から曳くやつと、陸に降りて陸から曳くやつと、同じ網でもそういうふうにしよったですな。小手繰網は片一方が2人くらいだから、3～4人か4～5人くらいでしよったです。漁がひまなとき、主に梅雨どきにしよったものです。当時の巾着みたいな大きな網はほとんど綿だけん、梅雨の雨に遭わせれば網がぼろぼろに痛みよったんです。だからその網はびしゃっと家の中にしまっというて、手繰りというて小さい網を作っておいて、いわば御飯のおかず取りですたい。小さい網です。

エビ流網

エビ流し網のときなんか、一昼夜船から上がりなしのときもありよったです。夕方出て行くでしょ。網は潮であげますけん、ちょっと1、2時間流しといて、それからあげてかかるとるヤツを全部捌いてしまっ、また潮を待つ。弁当持って行って、船に泊まって寝たまま、うちには帰りなし、というようなこともたびたびあったです。

ふなひきあみ 船曳網

いまカタクチをとる人は船曳網です。網の目の1目の長さが約2ヒロ、3m。それをオドシに作る。オドシというのは縄、稲ワラで作った大きな目の網ですたいね。獲物の入るところだけが綿であとはオドシ。脅して網をず〜っと引き寄せといて、最後は綿で作った袋があるから、袋の中に追いこむというやりかたです。このオドシのあるヤツは船曳網なんです。ばってん船曳でも船から引くヤツと陸から引くヤツがあって、仕立てがちよっと違います。網の式がですね。

カタクチはこまか（小さい）でしょうが、だから網の目の小さなヤツじゃなからんば逃げてしまうかといえ、そうじゃなかですもん。イワシちゅうヤツはオドシにはよく怖^おじるとです、あれは。怖じやすかつです。しかし、慣れてくれば怖じんとです。もちろん魚が入るところの目は小さくならんと駄目ですよ。あの大きな目のところじゃとれんです。

ワラで作る網だけん、ずっと使っとして、濡れとる間はそぎゃんな痛まんです。腐らせんごとするためには、使わん間はあげて干す、そういった手入れがものすごう忙しかったですね。そういう仕事も網子の仕事です。

これに関して理屈を言うたことがあつとです。水俣病問題で川本さんたちと県庁に行ったとき、ちょうど百間の浦に仕切網を作る頃だったです。何を言うたかという、仕切網を作る網の目の大きさが15センチで言いよったですもん。たとえば流し網の許可証にスズキ、アジ、コノシロとか書いてあるでしょう。県庁の水産課の職員に「あんたたちアジという魚を知っとるか」と言うたら「知っとる」ちゅう。「コノシロは」て言うたら、「知らん」て言う。アジは知っとる、コノシロは知らんと言うが、あんたたちは同じ3センチの網の目をワシたちに許可をくれとるだろうが、と。この魚は3センチでも通るんですよ。15センチの目なら、つるつる出たり入ったりしますよ。最初は魚は怖じますよ、網を入るればね。15センチであっても網を見れば逃げますけんね。「ところが慣れてくればつるんつるんして遊んどつとやが」と。そげん私が言うたところが、黙っとった。

ごちあみ 五智網

今の五智網は私らがやっとなつた時からすると、だいぶんふとか（随分大きい）ですね。どれくらいあるとか私ゃわからん。私どんがやっとなつた頃は、人の網を見て図面ば自分で紙に書いて、それを見ながら私ゃ網を作りよった、人には習わんで。あの頃長さがどんくらい

あったか、20ヒロ（30m）ぐらいかな。幅が難しくて、1番狭かところは4ヒロ、5ヒロ（4.5m～7.5m）くらいじゃあってん、1番深い所に行けば14～15ヒロ（21m～22.5m）くらい。今は違うと思うばってん、そん頃の五智網は網全体が袋やったんです。だから幅が広くなればなるほどコマをうんと入れんば袋にならんがな。そげんした仕立て方をしよったです。潮に向かって、向こう潮に網を入れといて、網のふくれた時期をみはからってこっちから（魚を）追いこんでいく、そういう漁法ですな。細長くなって横に広げるのが難しか。それで潮ば受けるような入れ方をせんばんと（しないといけない）です。

漁によって網はいろいろ違いますばってん、私は人の網を見とって、誰かが持つとるでしよ、それを見て自分で作りよったです。というのが出水の方に修業に行っとったでしょう。その間に網の作り方は教わってしもうとったもんですから。だからあの頃のことは私にはだいたい為になったとです。たいがいみんな自分の網は自分でつくりますけど、巾着の網は、網そのものは網屋から買うとです。それを仕立てるのは、親方が自分の氣にるように仕立つとです。だいたい似ちゃおるばってん、やっぱ一人ひとり流儀が違いますけん。

クレモナ（網に用いる化学繊維の網）が入ってきたのは阿久根に行ったときには使いよったから、30年ぐらいじゃないかな。阿久根に行ったのは昭和30年頃から37、8年くらいまでですけん。

6 不知火海の漁

漁場は不知火海一円と言ってよか（よい）でしょう。不知火海ちゅうのは南北に細長い海でしょう。1番狭いところで、昔の人の話じゃ2里半で言いよしたけん、だいたい10キロ。明治時代の人がどうやってそれを測らしたじゃろかと思うばってん、今自分の船で走ってみるとだいたい合っとなと思うです。いちばん広いところはどこかといいますと、出水市から獅子島まで7里で約28km。

南北の長さはどのくらいかというと、私どんのいる芦北が中心らしいですが、ここから黒瀬戸までが13里、それから三角ノ瀬戸までが13里。若いころからそう聞かされてきたですから、52km。南北は約100kmあまりということになりますか。

潮の流れは黒瀬戸に向かって引いたり満ちたりするけん、満ち潮の場合には南から北に、引き潮の場合は北から南にという潮の流れがあります。

不知火海の魚はほとんど移動します。イワシ、タイ、ボラ、コノシロ、タチ。ボラなんか底棲といわれとりますが、やっぱり季節によって移動するとです。移動する時期にはものすごく早かつですよ。今日はここにおったとしますよね、明日は鶴木山の方に行っとなちゅうくらい早かつですよ。移動する時期は春先が1番激しかごとあるです。それと秋口。あんまり登ったり下ったり動かん魚ちゅうとセイオ（瀬魚）ですね。メバル、ガラカブ、ベラとか、ああいうのはあんまり動かんですたい。セイオはすべての瀬にあります。

流し網とかクチゾコ網とか五智網とかいうのは、陸に近い方はせんとです。漁業権のある所じゃせん（ではない）とです。沖に出るからね。それで他の漁協とかからどうのこうのということはなかったです。漁業権は沖までだいたい2、3キロまでですね。^{かきよう}火共（不知火海共同漁業権。地域割りで1～13号まである）というのは後で出てきたんで、まだ長うならんです。その前はきびしい取り締まりというのはなかったんです。それまでお互いで認め合っている慣行のようなもので、たまにはお前あっち行けとか、こっち行けとかケンカしたり、そういうことも一時期ありましたけどな。火共と言い出してからは県のほうも取り締まるようになりました。火共は部会というのがあるんですが、ここあたりは4部会というですね、水俣から芦北は。漁業調整委員会で決めるようです。火共ができてからは2、3キロよりもうちょっと沖まで枠が広がったですね。その中にはよその人たちは許可を持たんば（持たないと）入られんとです。許可というても親方が1人持っとれば他のものはいらんわけですが。むかし手漕ぎでしよったころは、そぎゃん2キロも3キロも沖まじゃ行かんじやったですから。

出水あたりに行くときは、動力が小さかったでしょう。だけん出水に泊まって、とった魚だけをこっちに持って来るというやりかたをしよったです。網船まで引っぱって帰ると時間がかかって魚が悪うなってしまうから、魚を積んだ船だけがこっちに帰ってくる。魚は計石^{はかりいし}の販売所に揚げて、カタクチは持って帰って自分の家でイリコに作る、そういうかたちです。魚は干物に作ったりということはなしで、ほとんど鮮魚で出します。出すときにはやっぱりきれいな魚は出して、傷がついたりした魚は自分で食べるという、そういうことはあります。むかしから「売り物に花を咲かせろ」て言うでしょ、それとおなじことです。

行商の人は専門の人が計石にはおったです。行商の人は入札権をもっとる。入札権ちゅうのは漁業組合に入っとらんといかん、入札権ば持っとらんば販売所の入札はでけません。

自分のとこでとれた魚を売りに行くメゴイナイ（メゴという籠を担いで行商する仕事の名称）なら入札権はいらんです。自分で売って歩けば、市場に出すよりは値段が違いますけん。このへんの人で自分で持っていくというのは何人かしかおらん、わずかでした。戦時中から終戦直後は、農村の方に魚を持って行って米と換えてきよったです。すなわち物々交換です。メゴイナイという決まった商いがあるわけじゃなかつです。でも「今日はどげんしてでん持っていかんば、予約のあるけん」ちゅうようなこともあったと思いますよ、やっぱ。昔の人は足も丈夫かったですなー。あの道もないような道をねえ、歩くしかなかったから。そこば天秤棒でかついでですなあ。

うちのお袋は戦前から戦後しばらくの間までメゴイナイに行きよりました。うちのお袋はやめたけど、続けとったもんも何人かおったです。家内はしたことはないです。戦後になってメゴイナイがやまったのは（なくなったのは）、巾着網が始まるとカタクチのイリコ製造は始めたから手がいるごとなってきて、そういうことでもうメゴイナイどころじゃなかった

んです。

7 イリコ製造

イリコ製造はだいたい女が主体です。沖から帰ってくれば男も手伝うのですが。製品は仲買がおって佐敷、計石から買いに来よったんです。あっちの間屋、計石に磯見海産とか宮本海産とか間屋がありますが、あそこが当時からやりよったです。今は生で買うて自分で製造するです。今は漁師で製造するもんはおらんです。ほとんど間屋に卸しとるようです。

私らも自分で製造したけど、うちのもんばかりじゃ手がたらんときには、日雇いば1人か2人か雇いよったです。自分のとった分だけじゃなしに、人のとった分を請けて製造するともしよったです。余計とれたときなんか自分で製造しきれんときがあるでしょう。そういう場合は製造してくれんかと頼まれることもあるですから。お互いにそうやり合っとったわけです。毎日毎日みんな決まってるってことはいいですから。こっちは製造窯を持たんもんはおらんかったですから。よそから来る網子はそげんとは持たんばってん、ここにおる網子は製造も兼ねてやりよりました、ただ漁に行くだけじゃなくて。網元が一手に引き受けてやったような製造所はないです。



自宅前に道路ができる前の松崎氏自宅（1950年頃）
中央に立っているのは松崎氏の母
左にはイリコ製造の煙突がみえる

値段は親方が業者と決めます。仲買さんですね。親方が「あすこに決めたけん、あすこに

売ってくれんな」て言わすけん、そこに持っていくとです。一軒一軒別々の所に売っとるわけじゃないです。一人ひとり値段が違えば具合が悪かでしょう。製造の上手下手ちゅうこともないし。チリメンなんかは塩がきいとらんと痛みやすかです。塩がきいとるのときいとらんのじゃ、痛み方がだいぶ違うです。

そん頃は、イリコを売るときは、売る前に県の方から検査に来よったです。製造して900匁とか1貫目とか袋に入れて、ちゃんとしておくと、県から検査に来る。検査を受けてないヤツは売られなかったんです。検査をしたヤツは仲買がおって、仲買さんに売り渡しよったです。

一時ここにも湯浦漁協の荷捌き所ができたとですよ。普通は市場ちゅうばってん、ここは荷捌き所て言いよったです。市場のことです。それが出来たけんよそから仲買さんが来るようになったですね。出来た時代は……県道が通った頃ですが、荷捌き所の前まで道ができてストップしたですもん。で、うちの前の道なんかができる前に荷捌き所はできとったですよ。うちの前を道路が通ったのが(昭和)45年だから。

阿久根に行くとき阿久根に水揚げするでしょう、そうすると自分のウチでイリコを作った頃に比べると収入はだいぶ差がつくですたい。あの……1斗枴、1カエとも言うですが、あれ1杯がいくらちゅうて網元から請けとって、製造しよったけん。10杯なら10パイ請けますよね、そすと10パイ請けとけば、5つ、だいたい5〜6俵くらいは出ますもん(余分にできる)。出があるわけで、それは利益につながるわけです。出があるというのは1斗枴で請けたやつを製品になして1俵になすでしょう。1斗の場合には生だけん大分入っとるけん、それを1俵にして網元に払いよったわけですよ、1斗枴で1俵。ところが1斗枴からは1俵といわんくらいできるわけですたい。1斗のやつが1.5俵くらいでしょうかな、製品にすると。その出た分の0.5俵が自分のもうけちゅうようなもんで。

阿久根に行きよったころはその0.5俵がなかわけですたい、それでほんのワケチだけ欲しいな。たとえば100万なら100万水揚のあるでしょうが。そすと必要経費が、向こうでみんなて食うけんですね、それとか燃料代とかかかるけん、やっぱし15〜20万はひと月に経費がいりよったけんですね。

仮に経費が20万いれば残りは80万でしょう、その80万をみんなで分けるとだから。分けるち言うばってん、網も痛むがな。そっだけん4分6分ちゅうて、80万の4分を網元が取って、残りの6分、48万をみんなで分ける。こっちでやっとるときには48万を製品にして利益を出す。自分の家で製造すればそれだけ利益が出てくるがな、それは。阿久根ではこの利益が出らんちゅうわけですたい。阿久根では市場、問屋に卸すだけ。ただ原料として卸すだけです。1枴がいくらと入札で落とされればそしこ(それだけ)ですたい。それを計算して、あっただけですたいね。

4歩6歩というのはあたしどんが覚えた頃からですね。あたしらが戦前から前後にかけてボラ囲い網に行く頃にもうそぎゃんやった(そうだった)です。昔から、ボラ漁の時もそう

いうふうな分け方でしたね。

阿久根には女の人たちも炊事に、炊事当番に2人か3人頼んで行きよったです。うちにおったモンな日庸取りをしたり……。阿久根に行きよったころはこの京泊へんの人たちは、漁はほとんどやってない……。もう、でけんですたいね。その頃巾着をやめとったモンのおったから、その人たちは自分でやりよったろうけど。私どんなその頃はよそ者と一緒だったです。一度出て行けば20日間は帰って来んし。ひと月に20日ぐらいが闇夜でしょうが。10日ぐらいが月夜ですけん。

8 奇病のはじまり

まだ出水におった頃ですが、百間の浦のヘドロが深いのに驚いたこつがあります。船には必ず船頭棹というて棹ば載せとくとです。浅いところに行くと櫓が漕げんでしょう。そういう場合には櫓が漕げるところまで船を出すために、だいたい4ヒロくらいある棹ば載せとるとです。1ヒロが5尺だから1.5米、4ヒロで6mですか。それで試したことのあるとです。どのくらいこのヘドロはあるとやろかと。その棹が届かんかったんじゃけん。百間の浦で、戦時中ですよ。その頃からそげんヘドロがあったつですよ。おそらく私のごと、どんくらいあるとやろかちゅうて棹さした者はおらんど。

それは私が出水におったときに、あそこの百間の浦にもものすごくカタクチが寄っとったときがあって、それをめがけて行って網を入れたけど、網がヘドロにかかって上がってこんもんだけん、とうとう1匹もとりきらずに帰ったときです。網を回収はできたですけど、網がヘドロにかかってしまうもんだけん、引いても上がって来んとですよ。曳かれんもんあそこは。沼潟でどぎゃんもこぎゃんもでけん（どうにもこうにもできない）。茂道の岬を向こうに回れば茂道あたりの人たちは網は曳けます。あすこは茂道鼻と言いよったばってんが、茂道鼻からこっちの方は網は全然曳けんですもんね、その頃から、ヘドロで。

それは終戦前ですから、それからまだヘドロはずーっと垂れ流しよったんだから、その上にまだ重なったるじゃろう。その頃はヘドロがどこから来たとか、知りもせんし、聞きもせんしなあ。こりゃ何ちゅう品物じゃろうかぐらいしか思わんで。チッソから出とるなんて全然知りもせんとです。そこでとった魚もそこで拵えて食ぶるでしょうが。終戦後になって、ボラとってはらわた出してみたですが、ヘドロのどろどろて出て来よったですよ。ボラはヘドロを食いますからね。それでも、これは何ちゅう品物じゃろかち。全然知らんとやもんで。

昭和30か31年ころじゃなかったかなあと思うとですが、「水俣に変な病気が流行ったげな」と、「なんかその、奇病とか何とか言うとげな」というふうなことを耳にしたわけです。ここから水俣まで20キロありますからね。よそごとのようなふうだった。ここに電気がついたのが昭和22年です。それまでは電気はなかった、もちろん新聞もないし、電話もないし。で、風の便りで、奇病というのが流行ってきたということを私らは耳にしたわけですね。奇病ち

いうたら何の病気じゃろうか、全然わからん。なかなか我々はピンとこんじゃったんです。

こっちに第1号が、被害者が出たのが昭和34年じゃなかったかと思います。この山を越えたとこばってん、緒方福松さんという、ここは網元です。この人が第1号ですね。この人は何と言うですか、劇症も劇症、急、急、急性劇症型ち言うんですかねえ。とにかく病みついてから2〜3カ月くらいで失せました(亡くなりました)。狂い死にて言うとは、本家のオヤジ(小崎弥三)も狂い死にはしましたが、まだひどかったです福松つあんは。息子のヨシト君がものすごく悔しがとったですねえ。「忠男君、自分はチッソが憎い」て言いよったのを、覚えとります。

私はお見舞いには行っとらんです。隣近所なら行たつとつとかもしれんばってん。その当時まではまだこの道もないし、里道^{りどう}ば越えて行かななんだったし。そのときはよその人が水俣病にかかったような感じを受けたですもんね。「水俣病ちゃ何だろか」「奇病ちゃどげんとやろか」ちゅうような時期ですから。私らは福松つあんが亡くなったからといって、チッソが憎いとか思うたことはなかったです正直なところ。生活が苦しくなったり、患者が増えてきたりしたら、私たちも実感がわいてきたということですね。

水俣病とか奇病とかをどうして知ったか、よく聞かれるんですが、それは風の便りとしか言いようがない。「福松つあんが奇病やったげなばい」と聞く話でなあ、のちに水俣の方からそれこそ風の便りで聞こえてきたりで、べつにそんな詳しく話は聞いたことはなかです。

水俣病が起こった当時、こっちでは漁獲規制は聞いたことはなかです。認定申請をするなよというのはあったです。あたしの記憶では漁業組合からあったですね。湯浦漁協、当時のな。それはありましたよ。ばってん漁について、取るなとか取れとかそういうのはなかったですね。漁業組合の役員の連中から「とにかく、申請は待て」と言いよった。それは、福松つあんの倒れたあとくらいかな。オヤジが認定された後にはそんなのは……聞いてらんどとあるですね。

とにかく、認定申請するなという話もあったばってん、それより「そげんとに打ち合うとつたっちゃどげんするかい」というようなことで、あとから申請する気もなくなってきて……一時期はそういう時期もあったとですよ。ばってんまた、こりゃこげんしとってもどんこん仕様なかばい、ということになって。それから申請するモンがボチボチ出て来て。申請を出したのはあたしは遅かった方ですもん。ほかのモンがいつの間に申請したのか知らんとです。

みんなで話し合って「そんなら申請ば始めようか」とか、そういうのはなかったです。そげんとのあつとればあたしどんも一緒にやっとなとやもん。いつの間に他の人がしたのかもわからなかった。

オヤジが悪くなった当時、(小崎)弥三網の中で体調が悪くて漁に出られんという人はなかったです。やっぱオヤジがいちばん早かったです。魚を食うのは私どんも負けんごと食う

とるばってん。そら、オヤジはわたしどんがごつは食うとらん、私どんの方が達者か盛りだけん。なんちゅうことですかなあ、「のさり」ちゅうことかなあ。

水俣湾に行って漁をしょったのは戦前からです。こっちでとれんごとなったからという感じとは全然違うですよ。もう私が小学生頃からうちの兄貴なんか行きよったつだから。冬場こっちで取れ高が少なくなったときに、水俣の方には魚があるげなばい（あるようだ）と聞けば、そっちの方に行くということですわい。夏はほとんど行かんじゃったごとあるですね。水俣に行きよったというのは、やる気のあるモンというか……やっぱ泊まりがけで1週間とか行くとだけんですわ、誰でも彼でも行くわけじゃなかったですな。だけん、だいぶん水俣湾の魚を食うちゃおつですよ。

部落の中で誰々さんは具合が悪いとか、誰々さんは病院に行きよるげなとか、そういう話はあたしはわからんじゃったですわ。あんまり聞いたことなかったなあ。女同士はようしゃべるばってんが（笑）奥さんも知らんもん。とにかく仕事ばガマ出さでどがんするか（頑張らないでどうするか）、ちゅうようなことで。その頃は2人で漁を、2人行かんば仕事にならんもんだけん。人を頼んだっちゃ費用はやおいかんし（費用も安々とはいかない）。奥さんの方も昼間井戸端会議なんかしとるヒマはなかつたですわいそげんことは。（笑）

水俣病が発生した当時、佐敷の市場が魚を引き取らんちゅうことはなかつたです。とにかく一般的に売れんだったとです。奇病の出た頃は私どんも食いたくなかつたですわ一時期、調子の悪うして（気持ちが悪かったから）。まあ、短い間ですが、半年か1年くらい。それでも食わんではおられんから、その間は外海、東シナ海の魚は売ってあるでしょうが、佐敷とか湯浦には。そげんとば買うて食いよったんですわ。ただ近くの魚は食いたくなかつたです。買い物なんか、佐敷まじゃ（までは）漕ぎ船なら30分かかかるかからんかだったでしょうなあ、もう覚えとらん。今は私の船なら漁協まで3分で行きますけん。

ネコも飼うとりました。ネズミが網を食い破りに来るもんですけん。ネズミをとるためのネコじゃったばってんが、そのネコが変な仕草をする。あるとき、あれは何て言うんですか、人間で言うならテンカン、舞うような。ああいった仕草をして片っ端からネコは死んでいったです。私の家でも2匹飼うとったですが、どこの家のネコも死んでしまうというふうなことで。

最初の頃は不思議に思うだけで。こらなんじゃろか、なんちゅう仕草ばすつとだろかというぐらだったな。チッソが原因ちゃ知らされとらんかつたし、あとで分かったことでした。それからテレビで猫の狂い死にとかが放送されよったでしょう。それを見て、はあ、あれと同じバイと思った。その頃にやっと気づいたようなことです。

9 認定申請

これは私ゃ日にちまで覚えとっですが、昭和34年の11月2日に不知火海沿岸漁民が抗議行動をしたことがあります。「水銀の垂れ流しをやめなさい」という抗議行動です。そういうことが始まって、その頃すでに私らチッソが原因だということは耳にしとりました。それで、そのときにチッソはなぜやめんじゃったじゃろかと思うわけですよ。そのときにやめとれば、チッソも今のような苦勞もせんでよかったじゃろうし、行政も今のような苦勞はせんでよかったじゃろうし、私たちもこういった悲惨な目に会わんでもよかったじゃなかろうか。それが私の頭から離れません、やっぱ、今でも。

だいたい昭和34年頃からおかしゅうなって来たです。魚を多食して水俣病という病気に人間はかかるんだと、かかるとげな、という話があったもんですけん、結局とった魚が売れんごとなったです。私らが今日まで生活してくる中で、1番苦しかった頃、時代ね、これはやっぱしとれた魚が売れんごつなった、昭和34年だったと思うですよ。昭和34～36年、魚は多かばってん、とったっちゃ売れん。魚を売って生活するとですけん、それが売れんじゃったことで、とにかく苦しかったです生活が。生活保護を受ける寸前までいきました。

そのころは出稼ぎ者がものすごく多かったです。沖のモンもほとんど行っとるです。行った先を詳しゅう聞いたことはなかったばってん、トンネル工事をやったとかいう話は聞きよりました。みんな何カ月間かはほとんど行っとるです。関西の方が多かったつじやなかでしようか。

私どんな（私たちは）出稼ぎには行かんだったです。理由……とくに理由てないですが、私は魚とりが好きやもんじゃで、魚が売れるようになれば、魚をとらんばんて思うとるもんだけん。みんなが出稼ぎ行っとるとき、私どんな家内と2人で日雇とり、土方ですわね。こっちで土方があったし、土方のかたわら漁をして、夫婦2人で生活をしのいだちゅうわけです。出稼ぎに行った連中は、土方より稼ぎがいいだらうちゅうことだったんでしょね。そしてまあ、魚がまたぼちぼち売れ出した頃には、夜は夜ぶり（夜、漁を行うこと）、昼は県道の工事に行ったんです。その頃にこの県道はでけたんだから。

県道が出来上がったのは昭和37年じゃなかったかと思いますがねえ。出来上がるまでの工事期間が4、5年あったですからね。それまでは里道……^{りどう}里道てわかるですか？ 山を切り崩して自分で造った道、自転車も行くでないし、歩いて行くのがやっとなですたい。子供の頃から、学校行くにしても道はなかったけん、浜づたいに行くとか、だいぶ苦勞したっですよ。しかしあの頃はみんながそうだったけん、自分だけそがん目に遭うとじやなかですけん、別に苦にはならなかったですよ。そういう時代もあった。

自分々々の屋敷は自分で海の方に石垣を突きだして埋め立てて作ったところが大分あると

です。私とこなんかもそげんです。むかしはその前の植木から海ですけん。うちの前の道は、芦北町と合併したのが昭和45年で、その前にはできとったが、完全に出来上がったのは昭和46年ごろでしょうねえ。道ができてからはすぐ車が入ったけどね。それまでは行き来するには船が1番楽だったです。陸から（陸路を）行くときにゃ各家の前が全部通り道で、庭先ば遠慮なしですたい。お互いに、「おる家ん前は通るな」ちゅう者はおらんですもん。ついでにイリコなんかつまんでな(笑)。イリコはうちも作りよったです。そこらじゅうに天日干しをならべて、煙突もたくさんあったですよ。そういう風景がなくなったのは、阿久根に行きだしてから、昭和37、8年か40年頃でしょうね。

それで、どげんしようかなと考えながらずっと暮らしていく中で、結局福松つあんが亡くなられてから10年ぐらいは、患者はずっと途絶えとったじゃろう。それから昭和40年前だともいますが、オヤジの病気が進んできたもんですから、やっぱり自分も小さい仕事でもせんといかんと、網子だけじゃいかんと思って。ですから、自分で船を求めて、オヤジの所にも仕事に行きながら、土方にも行きながら、やってみました。で、そのころから生活もボチボチ明るい方向になってきたです。

そういうなかで認定申請をした人たちが、なぜ申請し始めたのかちゅうことはわからんです。誰と誰が申請したのか全然知らなかったですもんね。あとで話を聞いたら「あの人申請しとるげな、認定しとるげなばい」ちゅうことを聞いて、それでも私はあんまりしたくなかったです。私は申請したのが遅かったですもん。私が申請した1番の理由は、さっき言いましたオヤジがつつけて（倒れて＝水俣病になって）重症患者になったでしょう。ああいう症状で死んでいったしな。その弟がこれがオヤジとそっくりな症状でした。いっちゃん（少しも）変わらんオヤジの症状と。それから、ちょっと恐ろしさが出て来たつですよ。こりゃあ自分もこのままでよかつじゃろうか、ちゅうようなことで。それで、あたしゃとにかく「自分も検診だけなりと受けてみらんばん」、そして異常がなからんば幸い。まあ、あたしが認定されたのは43ですけん、40前後なら「何の仕事でも持ってこい」ちゅうごつ元気のあるときばってん、とにかく病気にかかるとればどうしようもなか、申請だけ一応してみろうかと。

そのころ相思社とか谷君とかの組がこっちにも来よったです。弥三のうちなんかによる手伝いに来よったです。来よったけん「あん人たちゃ何しに来とらすとだろわか」と。全然知らんでしょう、「ありゃどこの人たちじゃろか」と。あとから次第と「あ～なるほど」と分かってきたばってん、最初の頃はわからんやっただす。

オヤジは昭和48年の3月16日に亡くなったとばってん、私は昭和48年の1月に皆さんから勧められてやっと申請しました。まず、どうもこれは自分の体がおかしいと思うようになったのは、申請する10年くらい前からですね。歳が若いのになんとなくしびれを感じる、あるいは腰痛が出てくる、どうもおかしな、というようなことで。「そんならば自分も、いちおう

検診だけ受けてみるか」と、そしてどうもないと言われれば幸い、そういう気持ちで受けたんです。そしてところが、認定するまでの期間が早かった、私は。ほとんどみんな1年、2年待たされとったでしょう。長くなる者は5年も7年もかかったですが。どういうわけか私は申請してから8カ月目に認定したんです。棄却も何もない、たった1回で。私は早かったもん。「なんでじゃろうかな」と、「おら、そげん病気じゃなかぞ」て、かえってそのときは腹ん立ったふうで。ばってん1年、2年たつうちに、よく耳にしまった症状が出てきたもんだから、「ああ、こりゃやっぱ、熊大の先生たちの目は節穴じゃなかったな」て私は思った、というより実際に言いました。

なんで「おら、水俣病じゃなかぞ」て思うたかという、まだ元気がよかったからです。43歳だったから、まだ網を引くのも恐ろしゅうはなかごたる年代だけん、「おら病人じゃなかじゃ」そういう気持ちになったっです。40歳過ぎちゅうのは体がきついようなことはなか頃ですけんねえ。なーに、働けば金は出て来っと、ふつうに出て来っとだもん、そういう頃ですよ。

ばってん、私は漁師が好きやったし、魚も好きやったもんだから、そうするとやっぱり人一倍魚を食うとるから、その罰かな、と思ったり、「ナンがオレが水俣病か、変なこと言うなよ」という気持ちになったり、「水俣病にかかれば、治らんとげな」とか「治る薬もなかとげな」と聞いてとりましたからね。それを、43歳くらいで「お前は水俣病よ」ち言われると、みなして（皆がみんな）ガクッときます。これで自分はもう福松つあんとか小崎弥三のような、ああいう症状になるとじゃろう、病気に負けていくとじゃなかか、負けていくとかな、そう思いこんでしまうもんだから、やっぱしショックです。恐ろしかとですよ。それはもうお金どころじゃなかですもん。

その頃私の叔父が水俣において、電話もないのにどうやって聞きつけたのか、私の所にやってきて、「水俣病に認定されたからちいうて、お前1人じゃなかぞ」と。「もうどこでん、いっぺえこっぺえおらすとやっでん」そう自分だけで考え込んでも仕方ないぞと、私にハッパかけに来たんですよ。それから、なるほどなと思うようになりましてね、元の気持ちに戻ったわけでしたな。

10 川本輝夫さんのこと

川本さんと私らが友達のごつなつたとは、私が昭和48年の1月に水俣病認定申請をした、そして10月に認定したもんで、認定してすぐ川本さんと知り合つたですたい。私が認定したときに、川本さんにはじめて会つたときに言うたことがある。「川本さん、私はチッソだけが悪かつじゃなかて思う。行政にも悪かとこがあるて思う」そう川本さんに言いましたよ。

私らが漁師すると、知事の許可なしにはできんとですばい。漁師は知事の許可が必要ですよ。それとまったく同じで、人間が食うていかん代物をチッソが作った。それはチッソが悪かつです。ところが、許可なしにチッソはやっとらんはず。そこら辺を考えると、私は

チッソだけが悪かつじゃなくて、国、県にも責任があるとじゃなかか。私は川本さんに会ってすぐ言うたですよ。その頃の我々の患者連盟の名称は、東京チッソ交渉団で言いよったです。

川本さんはこの公害問題については熱心かったですよね。皆はどう思っとるかは知らんばってん、私は川本さんがあれだけ引っ張って行ってくれたから、これだけ救済された患者が出てきたと思うですよ。あの人はとにかく、我が家はほったらかしで、それ一筋にがんばらした人だけんで。あーいうことはできませんすもん。とにかく我が家は借金起こしてでも、そういうやり方ですもんね。聞くところによると、自分の親父さんのことを調べるために墓を掘り起こして、そして検診かなんかしたっじゃなかですか。どこの人でもせんですよ、そぎゃんことは。それだけ熱心だったんですなあ。

話が前後するばってん、去年だったかな？ 1年に1回慰霊祭ばするですもんね。水俣病が公式確認された、あれ5月1日だったですね。毎年犠牲になった人たちの慰霊祭をするんですよ。そのときに、ひとつ祈りの言葉をしゃべってくれんかと、市役所からの依頼があったんですよ。そのときも、なぜ行政あるいはチッソは早く手を打たんかったかと。それが自分は残念だと。そのときに、昭和34年頃に手を打っとけば、こういった悲惨な問題は最小限食い止められたはずだと。それをしなかったから、拡大していったんじゃないかと。そのときに環境大臣もおったし、県知事もおったし、その前で堂々と発言しました。最初隠そう隠そうとしよったんじゃなかろうかと思ったですね。それが結局大変なことになってしまった。

11 女島の気質

網元たちは気持ちのふとかったんですな。私ゃそげん思いよった。これはだいぶん気持ちのふとなからんばこの仕事はでけんばいて。小崎弥三もそういうところがあったですよ。ばってん親分肌ちゅう感じじゃなかった。おとなしかばかりで、人にケンカしかけたり、そげんことは全然なかった。しかし仕事面については肝のふとかったです。どっからこのゼニば持って来っとだろうか、ちゅうごとやりよったけん。とてもゼニを持っちゃおらんやったろうが。戦後すぐのころ、日本の総予算が1兆円げなばい、あきれたもんな1兆円ち、1兆円てどのくらいあっとやろうかて、私どんが小青年のころに話ば聞きよったが、今は何10兆やからなあ、その頃の話ですけん。

私どんは個人貸しから借金するとがほとんどでしたな。そげんしたことは私もあるですよ。私たちの場合はほとんどそれだったですが、あとからは近代化資金とかできたからな、あれから組合を通して資金を借りたり、いろんなこつばしてみましたよ、歳は若うしとって。いまうちの息子たちにゼニ借りて来いち言うたっちゃ、とても借り道は知らんどばってん、今考えてみれば、20歳代でようやって来たばいなど、わしゃ思うときもある。若っかときは元

気のあるもんだけん、恐ろしか道は知らんとですな。稼げばゼニは出てくるもね、ちゅうようなことで。昔のものは気のふとかったですな。

網元たちはまたそれに増して、何十倍で気持ちのふとかったですな。ゼニをどうやって調達しよったのか、そげんとは全然わからんです、そのころ漁協はあったばってん金は持たんだったですけん。農家の方から借りたちゅうようなこともあったでしょうね。そんな、オレはゼニばどこから借りてきたぞちや言わんもんじゃけん(笑)。親方同士はどっから借りたかというような話はしよったかもしれんけど、私どんな知らんですなあ。

(小崎) 茂義さんも肝っ玉のふとかったですなあ。そして網子たちにでん(網子たちにも)やさしかったですもん。網子たちでん隣近所にでんやさしかったもんあの人。うちのオヤジと同じことで、人とあだこうだ争うとか、聞いたことも見たこともなかったです。ここ(沖集落)の親方で厳しかった人ちゅうのはおらんですな。また、そういった人がしても網子どんがついて来んもん。ここの親方はやかましきバイちゅうのはあんまり……おらんですな。

緒方福松さんと緒方徳三郎さんはライバル関係にあったというけど、なんというか、両方とも悪か人間じゃなかった。兄貴と弟やもんじゃって、お前が1斗取って来るなら、おら2斗取って来っどちゅうような、そういうふうなことはあったかもしれんですなあ。網子さんたちに厳しいとか、そういうことは聞いたことはなかです。

ここは村中がみんなどこかの網元に行って仕事してきとるもんだけん、「同じ釜の飯を食ったモン同士だ」と私は言うのですたい。そっだけん「あんたたちは未認定患者でワシたちは認定患者」というのはおかしいと言うわけです。同じ場所で同じ仕事をして、同じ飯を食うて来とるとだけん、そういうはずはなかっじゃ。私たちが未認定患者の応援に廻ったというのはそこですよ。

福松さんが病気になったけんちゅうて、あの人たちが取ってくる魚は危なかぞというふうな話は聞いたことはないです、ただ、福松さんは劇症型で原因不明だったでしょう、だから病気そのものに恐ろしがった者はおったち思いますよ、原因がわからんとやもんじゃで、私もいつとき半年ぐらい魚を食いたくなかったですもん、それは福松さんが病気になったからとか、その当時は、私はそういった気持ちはなかったですね、ただ、世間で騒いでるとか、チッソにおごりに行ったりしたもんだけん、それでこりゃ魚は食わんがよかぞと、お互いに、一般的です。

阿久根からチッソの工場に行くぞというときに、生活が苦しくなったことへの不満はやっば若干あったですよ。そういったことが高まって一緒にみんな、とにかくチッソの悪かっじゃって、なんとか止めさせんばん、魚が取れんごとなったとはチッソのせいだけんということですよ。

漁民暴動のときは私は30歳でした。組合員は行ける者はみんな行っただすが、女島のものは過激なことはせんだったです。湯浦の漁民は案外おとなしかもんじゃって、警察のお世話

になったモンはほとんどおらんです。

チッソが排水を流したけん阿久根まで来とるんだという、そういう感じはありました。それで私どんは阿久根からやもんじゃって（阿久根からだったんだ＝阿久根から行ったんだ）。船からじゃなく汽車から来たっですけん、他の網の人たちと一緒に。巾着に行っとらん人たちはこっちから船で行っとるんですね。阿久根じゃみんな陸じゃほとんどみんな一緒にの所におるもんだけん、「こげんこげんげなばい（こういう次第らしい）」「んなら行こい」ちゅうようなことですたい。

工場（チッソ水俣工場）の中にも入ったですよ。あそこに門を入れてすぐ右の方にふとか事務所のあるでしょうが。あそこの中まで行きましたよ。あたしどんな後ばかり。打って打ち破ってしもうた後にばかり、あたしどんな。早よ行って打ち破ったモンなブタ小屋にお世話になったモンもおとやろばってんが、あたしどんなブタ小屋にはお世話にならんで済んだですな。湯浦の者は1人もおらんち思います。阿久根から行くときに、こういう行動するという予定みたいなものは、あたしどんにや知らされとらんです。「とにかく行こばい」ちゅうようなことで。そのときの指揮者というのか、三役というのか、竹崎さんに、龍ヶ岳の桑原、田浦の田中熊太郎さんですね。この人たちがやっぱし……（笑）がんばってくれたっですが、天草んとにや桑原ちゃんやわでにや「霧が里」て言いよったですたい私どんな。宮相撲とりよったていうもんじゃで。

じゃばってん、そんな時はチッソは憎かったつですな、生活ができんごとになったもんじゃって。あの当時は生活がきつかったですな。生活保護を受けるホンの寸前まで行きましたもん。まだ生活保護までは受けんやったばってん、どうしてもにっちもさっちもいかんごとなって。それは巾着やってるところからで、阿久根に行く前後ですたいね。魚が売れんごとなったときにや、そげんあったばってん、生活保護をもらうちゅうのは恥ずかしくもあるなあ、ちゅうようなことですな。そんな頃はだいぶんな目にあいました。

あのときの鳥井（正直）さんは町長だったですが、漁協の組合長も兼務してもろとったです。だいたい漁師肌じゃなか。漁師じゃなかったですもんね。もとは学校の先生じゃなかったですかな。私もそうだったですが、組合員も鳥井さんを信用しとって、鳥井さんがおだやかな性格だったということも影響があると思います。漁師肌じゃなけんものたらん、「もちっとハマればよかて」という声もあったばってん、それを口に出して言う者はおらんかったですな。やっぱり百姓と漁師ちゅうのは、性質が全然違いますもん。そりゃー違います。言葉遣いひとつにしても。

そりゃ農家の人たちがつかうような言葉遣いしよったっちゃ、魚はとれんもん。たとえばアンカー（錨）ならアンカーをたぐって上げますな、そのときに「イカリば早よ上げんか！」ちゅうとと「イカリば早くあげて下さい」ちゅうとはだいぶ違うもん（笑）。百姓の人は言い方が丁寧かですよ。百姓の人が遊びに来て船に乗ることがあったですが、そうすると「あら、

あん人たちケンカすつとじゃなかるか」ち言うぐらいに、漁師の言葉は荒かとですよ。「魚があすこにおるばいた」で言うとっても、とてもじゃなかもん。沖に行くとるときには、気も荒かです。そげんなからんとああた、生き物はとれんです。やっぱり生き物をとるとですけん。沖でけんか腰でやったっちゃ、陸にあげれば何のことはないですけね。湯堂や茂道はケンカが多かったという話も聞くですが、こっちはケンカはあんまりせんですな。計石とかよそとケンカしたという話も聞いたことはなかです。漁場で、漁の途中でなら「こっちは遠慮せんかい！」とかそういうことはあったつですよ。

私たちが48年に認定されてから、自分たちばかりが被害者じゃなかるう、そう思い始めたです。同じ生活をして、仕事も一緒、食生活も一緒ですから。私たちの他にも、この地区にまだ被害を被っている人があるはずやと。自分は認定された、すなわち救済されたからよさそうなもんですが、認定が遅れた人たちのことを、「そうじゃないのだ、公害を被っているはずじゃ、だから1人でも多く救済をせんばいかん（しなけりゃだめだ）、してもらわんばいかん（してもらわないとダメだ）ていうことで、私らは川本さんを先頭に、その運動に回ったですよ。

そういったこともあって、こっちは差別はなかったと私は思う。私らは認定患者と未認定患者の差別ていうようなことは、考えたことはないです。私は行政区長を12年やとったですよ。辞めたのが平成8年に辞めました。で、辞めるときにある会合で、その頃「もやい直し」という言葉が出ましたよねえ。もやい直しセンターを作ることにしたと。そのときにある人が行政の人に「もやい直しちゃどういふもんですか」と、こう質問したですよ。そしたらある人が「あれは、認定患者と未認定患者が仲良くするようにたい」と、こう言わしたもん。私はすぐあたまから否定したつです。「そら違う」ち。私はその時初めて「私は認定患者」て言うたんです。それまでは言わんじやった。それで「自分も認定患者だ」しかし「未認定患者の応援をしたのは誰ですか、私らですよ」て言うたんです。「差別するとなら応援なんかしませんよ」。その言うた人は赤恥かいてぎゃふんですよ。ですから、「差別、差別」ちいう話声を耳にしますけども、ここ女島では、まずなかったということです。差別はまずなかっただろうと思います。

12 患者運動

平成7年でしたか？ 政治解決はね。あの当時被害者として認められたですよ。結局は和解金でね。でもあの人たちは残された人たちなんですよ。ほとんど認定患者から漏れた人たちなんです、あの人たちは。だから、私たちはあちこち行きましたよ。県庁にもだいぶん喧嘩しに行きました。なんとかしてくれっちな。東京にも、チッソ本社とか、だいぶん行ったですよ。それが私たち連盟の会で、我々ばかりじゃなかはずです。

私たちは今は年にとって、体もこうなってきたし、未認定患者の応援なんかもしきらんばってん、最初の頃は、自分が救済されとって隣の人が救済されんはずはなかつじゃと。なんとかして加勢せんばちゅうことでした。水俣あたりを行くと差別を受けよったとかいう話をよく聞くから、それで私はどこでも言うとはってん、私は差別を受けたとか、したとかいう経験はなかって言うんです。差別をするような気持ちがあれば、未認定患者の応援とか、支援とかせんすもん。「お前どんがこつば知ったこつか」という気持ちはこっちはみんな全然なかですもん。

それで、私が言うとは「あえて言うならば、大きな差別は受けたことはある」で言うんです。どういったこつかと言うと、県の方でニセ患者とか言われたことがあるでしょう。あれはひとつの大きな差別じゃなかったか。それは私は言います。こっちで隣近所で直接浴びせかけられたということはないです。浴びせかけるより、こっち（認定患者）のほうが、「何とかして加勢せんば」と、それがみんな強かったです。

私も会長やっとりますが、歳をとってきたし、あっちこっち飛び回るということが体が動かんでしょう。川本さんは自分で勉強して、いろんなことを考え出して、自分で引っ張って行ってくれたですね、私たちを。ところが、私たちは川本さんの真似はできんから、川本さんと違った方法を考えて、毎年総会をやって、来年はどういったことをしましょうかと、皆さんに聞いて回って、総会で決まったようにしか私たちは動かないです。川本さんが亡くなれる前にそう決めました。結局、お互い歳もとってきたし、あっちこっち駆けずり回るのは無理になってきたと。自分たちは自分たちのあれに応じて、運動を、行動、応援をやるかというふうに切り替えたんですよ。